

学習活動の重点化等に資する年間指導計画参考資料

歴史的分野指導計画表(第3学年)

時	テーマ	授業づくりの視点	授業のねらい	学校の授業以外の場において行うことが考えられる教材・学習活動
第5部 二つの世界大戦				
第8章 帝国主義の時代				
8・9章の導入 pp.192-193			困難な時代に活きた人びとの体験から学び、戦争の惨禍に向き合う。戦争は、人類に何をもたらしたか考える。	章扉 (pp.192~193) の写真や地図、語句を通して「変わる世界の女性たち」について考えてみる。(1時間)
80	(1) 日本と清が、朝鮮で pp.194-195	<ul style="list-style-type: none"> 朝鮮民衆は、役人の横暴なふるまいを正すべく立ち上がった。その動きを抑えられず朝鮮政府は清に軍隊派遣を求めた。 日本軍による朝鮮王宮の占領から始まった日清戦争は、朝鮮をめぐる日本と清の戦争だった。 清軍を攻撃した日本軍は朝鮮農民に兵站を担わせようとしたが、反発も大きかった。 東学の指導者全権準は、日本軍を朝鮮から追い出すべく兵を挙げた。 日清戦争に勝利した日本は、台湾を割譲されたが、台湾を植民地とするためにはさらに戦争をくり広げなければならなかった。 この戦争に参加した日本の兵士たちは戦場でなにを考えたら想像させ、話し合わせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 日清戦争の戦場で日本の兵士たちは何を考えたか想像する。 	
81	(2) 分割される大陸 pp.196-197	<ul style="list-style-type: none"> 帝国主義の時代を、列強間の力関係の面だけでなく、植民地・勢力範囲に分割される地域から考える。特に、取り上げられることの少ないアフリカの人びとの歴史に目を向けたい。 ジャジャ王は、勝海舟・岩倉具視とほぼ同年生まれ。19世紀半ばから20世紀初めは、イギリス(ヴィクトリア女王; 在位1837~1901年)が主導し、欧米列強が植民地、勢力範囲を拡大していった時代である。この時代、アジア・アフリカの中での、日本の行動形態の変化を考えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> アフリカやアジアの人びとが生きる地域が、帝国主義諸国の利益と都合によって、地図の上で分割され、大きな傷痕を残していることを知る。 義和団制圧の連合軍への参加によって、日本が得たもの、失ったものは何かを考える。 	
82	(3) 戦場は中国だった pp.198-199	<ul style="list-style-type: none"> 日露戦争は、戦場とされた中国、兵站基地とされた朝鮮(大韓帝国)の民衆に、大きな被害をもたらした。また、日本、ロシアの民衆にも大きな負担を課した。民衆の側から、近代の戦争をとらえたい。 日露戦争は、義和団戦争への参戦によって帝国主義国の一員となった日本が、ロシアと戦った歴史上初めての帝国主義戦争となった。アジアアフリカの植民地支配が拡大・強化され、世界の対立が二極化(英仏露vs独奥)して第一次世界大戦につながったことにも目を向けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 日露戦争は、中国を戦場として行われ、中国・韓国の民衆に大きな被害を、日露両国民に大きな負担をもたらしたことを具体的につかむ。 日露戦争は、どのような開戦の勅語によってはじまり、戦後、日本と欧米列強のアジアに対する植民地支配がどのように変化したかを考える。 	
83	(4) 国語をつくる pp.200-201	<ul style="list-style-type: none"> 日清戦争後、台湾を植民地とし、国語(近代日本語)を教えることによって同化しようとした。そのため、国語を確立する動きが進化した。 しだいに学校が地域のなかで位置づき、授業料が無償化されることによって大勢の子どもたちが学校に通うようになった。 学校でどのようなことが教えられたか、子どもたちがどう考えたか、話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語がどのようにつくられ、学校に通う子どもたちがどういうことを学んだかを考える。 	
84	(5) 土地を奪われた朝鮮の農民 pp.202-203	<ul style="list-style-type: none"> 1910年、日本は韓国を併合した。中枢機関としての総督府を置き、憲兵警察を配置して支配した。 土地調査事業により、強権的に近代的土地所有制度をうち立てようとしたが、それは地主に有利な制度であった。日本語での教育も押し進めた。 植民地朝鮮の人びとが、日本の支配や在朝日本人に対してどう思っていたか想像させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本のつくった学校に通う朝鮮の子どもたちは日本人の先生をどう思っていたか想像する。 	
85	(6) 生糸と鉄 pp.204-205	<ul style="list-style-type: none"> p.180「繭から生まれる」の学習と関連づけ、村落共同体を基盤とした確水社などの結社と異なる製糸企業の勃興と特色に気づかせる。 工女の労働や小作農についての資料から、日本資本主義の成立を人びとの姿を通し考えさせる。 産業革命と戦争との関係、成長する財閥にも目を向けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 製糸工女の働き方を知り、そのような働き方をする理由をつかみ、日本社会が、革命により、どのように社会が変化したかを考える。 	

86	(7) すべての力を戦争へ pp.206-207	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次世界大戦は、大量の死傷者（感染症を含む）を出し、長期にわたる総力戦であった。この戦争を戦場の実相と、兵士として戦い死んでいった青年から考える。 ・この戦場の無残な場面が、帝国主義国による植民地・勢力範囲の再分割をめぐる対立と軍事同盟から生じたことをおさえない。 ・教科書pp.196～197、198～199、202～203を受け、これから学習する教科書pp.208～209、210～211、212～213と、「帝国主義の時代」全体を見通して準備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国家間の対立から始められる戦争は、戦場では大量の死傷者を出す殺し合いとして行われることを受け止める。 ・長期にわたる大量殺戮・大量破壊から、戦場の兵士に限らず、すべての国民、植民地住民も動員する総力戦となったことを理解する。 	
87	(8) 21カ条は認めない pp.208-209	<ul style="list-style-type: none"> ・日本が第一次世界大戦に参戦したのは、中国、特に満洲での権益維持・拡張を進めるためであったことを理解させる。 ・中華民国の人びとにとって、21カ条要求は主権をおびやかす、認め難いものであったという視点を意識させる。 ・大戦の際の日本の行動が当時の国際関係にどのような影響を与えたか考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・21カ条要求は中国の人びとにどのような受け止められ、日中関係にどのような影響を与えたか考える。 	
88	(9) パンを、平和を、土地を pp.210-211	<ul style="list-style-type: none"> ・食糧、平和、土地を求める人々の願いが、休戦につながったことに目を向けさせる。 ・レーニンたちの思想が、当時の世界の人々になぜ受け入れられたのかを考えさせる。 ・大戦終結後、軍縮と平和への努力が重ねられたこと、世界各地で民族自決や民主化を求める動きが高まったことにも目を向けさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な人々を動員する総力戦が続く中で、人々は何を願ったのか、その願いは何につながったのか考える。 	
89	(10) 独立マンセー pp.212-213	<ul style="list-style-type: none"> ・1919年3月1日に始まった独立運動は朝鮮全土に広がった。各地で繰り広げられた運動は、地域の要求に基づいて多くの民衆が参加した。 ・日本はその運動を武力で抑えしたが、それまでの「武断政治」を変更せざるをえなくなった。いったんは抑えられながらも、その後も独立運動がさまざまな形で続けられた。 ・この運動のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させることで、独立の本質に迫らせたい。世界の動きとも関連させて考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・独立運動が世界各地で起きていたことを知り、運動の中で当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像する。 	
90	(11) 始まりは女一揆 pp.214-215	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の打ちこわしと比較して米騒動の規模や特色を理解させ、かつてない規模の民衆運動になった原因を、日本や世界のできごとと結びつけて考えさせる。 ・米騒動を転機とする労働運動や農民運動の発展を理解し、民衆の願いや成長に目を向けさせる。 ・囲み「少女たちの労働争議」は、教科書p.204「生糸と鉄」と関連させて考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・米騒動がかつてない規模の民衆運動になった原因・背景を考える。また、米騒動をきっかけに働く人びとはどのように変わっていくか考える。 	
91	(12) 女性は太陽だった pp.216-217	<ul style="list-style-type: none"> ・女性運動や水平社運動などの広まりのなかで、人びとが願ったものを考えさせたい。 ・自由民権運動期の女性の政治活動と地方参政権の獲得（pp.182～183）、第1回帝国議会での植木枝盛の主張（p.187）と関連させる。 ・平等を求める社会運動が進む一方で、関東大震災時の朝鮮人虐殺が起きた理由を考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・女性たちはどのような社会の変化を背景に何を求めて立ち上ったのか考える。また、平等を求める社会運動がさかんになる中で、関東大震災時に朝鮮人虐殺が起こったのはなぜか考える。 	
92	(13) デモクラシーの波 pp.218-219	<ul style="list-style-type: none"> ・米騒動を契機としてさまざまな民衆の運動が活性化し、男子普通選挙が実現していく時代の特色をつかませる。第8章の最後のテーマであり、それまでの学習とのつながりをもたせたい。 ・デモクラシーが高まった時期と、植民地の独立運動を弾圧した時期が重なることに気づかせ、さまざまな立場の人たちの願いと重ね合わせて、民主主義の歴史を考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普通選挙運動の高まりと実現を具体的に学び、一方でなぜ女性選挙権や植民地の議会は認められなかったのか考える。 	
	8章のまとめ・歴史を体験する pp.220-221		山本宣治という人物を調べることから始めて、地域の社会運動家について調べてみる。	第8章での学習をふり返る。地域の人物調査に取り組むにはどのような方法があるか考える。（1時間）
第9章 第二次世界大戦の時代				
	9章の導入 pp.222-223			章扉（pp.222～223）の写真や地図、語句を通して「大戦の終わりを迎えた世界」について考えてみる。（1時間）
93	(1) チャップリンが来た pp.224-225	<ul style="list-style-type: none"> ・1920年代、アメリカ経済は空前の繁栄をとげ、大量消費社会を実現した。自動車社会が到来し、家庭電化製品も普及し始める。今も影響力が大きいアメリカ的生活様式とそ ・日本でも、1920年代には都市中間層がひろく形成され、大量消費社会の萌芽がみられた。新聞・雑誌・ラジオ・映画・流行歌などに象徴される大衆文化が形成されることを具体的にとりあげる。デモクラシーと軍国主義の交錯する時代であったことも意識しておきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミッキーマウスとチャップリンに注目し、アメリカで大量消費社会が実現することを学ぶ。「東京行進曲」を例に、日本でも都市を中心に大衆文化がひろがることを理解する。 	

94	(2) 世界中が不景気だ pp.226-227	・アメリカ、日本ともに、不景気の中の人びとの状況でできる限り具体化して、それを切実に受け止められるように提示していきたい。	・世界中に広がった大不況によって、アメリカや日本では、人びとどのような苦境に立たされたか、その具体的な姿を見る。
95	(3) ヒトラーの独裁が始まる pp.228-229	・ヒトラー独裁のことは、ある程度知ってはいても、その具体的な場面を見れば、それは単に、独裁者としての強権・権力を恣にするものか、国民もそれを支持していたのかと、問いが生まれるだろう。 ・授業はそういう問いが生まれるように、具体的な場면을重視した展開にしたい。	・ベルサイユ条約破棄、軍備拡大、国会を超える権限の獲得、ユダヤ人迫害など、ヒトラー独裁のもとで行われたことを具体的に取り上げ、ドイツ国民は、それを支持していたのかを考える。
96	(4) 鉄道爆破から始まった pp.230-231	・張作霖爆殺、山東出兵、満州事変（柳条湖事件）とつづく日本の中国侵略は、中国国民革命の進展に対する日本の権益擁護・拡大のための軍事力行使だった。図版□2の地図は、「国民革命vs日本の侵略」という構図を示しているが、授業の筋道もこの構図に基づいた形にしたい。	・山東出兵、張作霖爆殺から満州事変・満州国建国に突き進んだ日本の行動をたどり、それに対する国民政府の連盟提訴や満州での開拓民の苦難など、中国側からの抵抗に気づく。
97	(5) 問答無用、撃て pp.232-233	・五・一五事件、二・二六事件などのテロ・クーデターについては、その背景や思想に深入りせず、事件の経過を見ていくことを授業の中心に据えたい。むしろこれらの事件によって、以後の政治や社会がどのように変化していったかに目を向けさせたい。	・五・一五事件、二・二六事件の経過を見ながら、軍部の発言力が増大し、対外的にも（対中国）国内でも（国家総動員法、オリンピック返上）、戦争への道があらわになったことに目を向ける。
98	(6) 戦火は上海、南京、重慶へ pp.234-235	・上海・南京・重慶での日本軍の行為を見れば、「日本はなぜそんなことをするのか」という疑問が出てくる。そこには、満州事変以来の日本の侵略に対する中国の抵抗が強まり、それを打ち砕こうと日本は侵略をさらに拡大する、という構図が見えてくる。つまり日中戦争とは、「日本の侵略 vs 中国の抵抗」であることに気づかせたい。	・上海・南京戦で、日本の侵略戦争が拡大していく状況をとらえると同時に、中国側の抵抗もより強化されることに目を向ける。
99	(7) 戦火に追われる人びと pp.236-237	・第二次世界大戦の「経過」よりも、「戦火に追われる人びと」に焦点をあてたい。ドイツ軍に占領されたポーランドやソ連では、人びとの身の上は何が起きたか。無差別爆撃としての空襲はどれだけ人々を苦しめたか。そういう観点から第二次世界大戦を見ていきたい。	・独軍のポーランド、ソ連進攻、英米と独軍による無差別爆撃を具体的にみて、「戦火に追われる人びと」の姿から、第二次世界大戦を考える。
100	(8) 東南アジアの日本軍 pp.238-239	・アジア太平洋戦争は、まず東南アジアへの侵略、支配として展開した。授業は、東南アジアでの日本軍の侵略行為を明らかにし、日米関係などそこに至るまでの経過は、要点のみ扱う。	・マレー半島攻撃のあと、日本軍は東南アジアでどのような加害を行ったかを明らかにして、大東亜共栄圏とは何だったか考える。
101	(9) 戦争と二人の少女 pp.240-241	・1933年1月のナチ党政権成立以後、急速にユダヤ人への迫害・「人種」差別政策が強められた。その事実をアンネ＝フランク一家が強いられた隠れ家生活を通して知る。また、教科書p.229の「水晶の夜」とのつながりをもてるようにする。 ・同時期、オランダで抵抗運動（レジスタンス）に加わった少女がいた。オードリー＝ヘプバーンである。彼女の活動の事実を知る。また、教科書p.237囲み「ヒトラーに抵抗した若者たち」とのつながりをもてるようにする。 ・一方、数多くの犠牲者を出した、ポーランド・アウシュビッツ収容所での子どもたちはどのような現実と直面していたのか。その苛烈な事実を学ばせたい。	・ナチ党のユダヤ人に対する迫害・差別政策やアウシュビッツ収容所での子どもの処遇について学ぶ。その極端で過酷な社会の現実に対して、決して「盲目」となることなく、向き合い続けた二人の少女の存在と活動を通じて、社会をつくること、歴史をつくることの大切さを考える。
102	(10) 赤紙が来た pp.242-243	・民衆にとっての戦争を体験したい。戦時下の国民生活をとりあげ、政府が物資も言論・思想も、学校教育も統制していた実態をモノ教材や写真、証言を使ってリアルに再現する。 ・「加害者になるところまで苦しめられ追いつめられた被害者」（黒羽清隆）の姿を浮かび上げさせる。徴兵され前線に行く兵士は？銃後の女性は？どんな役割を？「加害」「被害」「加担」「抵抗」の四つの面に注目して授業をつくる。民衆の「善意、真面目さ」をどう評価するか。どのような権力支配も、人々からの一定の支持、民衆の主体的な支援なしには成り立たないのだ。	・戦時下の民衆の生活に目を向ける。戦場に行く兵士、銃後で働く女性、学校で学ぶ子どもたちはどんな体験をしたか。具体的な事例を通じて体験する。その上で、民衆の一人ひとりの行動と行為が政府・軍の推し進める戦争とどうかかわっているのか、動員・協力のしくみを考える。
103	(11) 餓死、玉砕、特攻隊 pp.244-245	・戦局の転換とは、日本が敗戦に向かって絶望的な戦いを繰り返す状況への「転換」だと捉え、その状況の典型事例として、餓死、玉砕、特攻隊を取り上げて、日本軍の戦法の特質を考えさせたい。	・ガダルカナル、サイパン、特攻隊、それぞれの戦い方の特質を見ていくことによって、日本軍とはどんな軍隊だったか気づく。

104	(12) 町は火の海 pp.246-247	<ul style="list-style-type: none"> ・空襲の危機から逃れるため、学童疎開が強行された。しかし、残留組を排除したため、空襲によって多くの子どもたちが犠牲となった。 ・一方、疎開組は極度の体力低下に陥り、空襲の激化で家も家族も失う子どもが続出した。 ・本土決戦体制のもとでは、部隊や工場の移動に伴い、再疎開、再々疎開を余儀なくされ、疎開学童は難民化を強いられた。 ・疎開と空襲・本土決戦体制を、このように表裏一体のものとして考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学童集団疎開の「疎開組」と「残留組」、それぞれの子どもたちのようすを見ながら、空襲に際して両者にどんな問題が生じたか、学童疎開は子どもの命を守ったのかを考える。 	
105	(13) 荒れ狂う鉄の暴風 pp.248-249	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄住民の多大な被害は、米軍の猛攻によるものであるが、友軍・日本兵との関係によって生じたものも多い。この事実を授業の中心に据えたい。 ・そうすると、生徒の疑問は、なぜ日本軍はそんなことをするのかという点に集中する。その点からこそ、沖縄戦の目的は何だったのか（捨石作戦）に目を向けさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・米軍の猛攻撃のなか、沖縄住民は日本軍によってどのような状況におかれたか。その事実を具体的に見ていくことによって、日本軍の沖縄戦での作戦目的を考える。 	
106	(14) にんげんをかえせ pp.250-251	<ul style="list-style-type: none"> ・被曝の実態―残酷性を人びとの姿の中に見ることによって、最後に疑問として、加害者側の意図を問うという筋道の授業にしたい。 ・原爆体験は、加藤さんのように現在の時点でもなお、深い傷となって残っている。授業は、その現在の地点から、あの時点での人びとの姿を見る形で進めたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・原爆投下による、人びとの被害の状況を具体的につかむ。そのことによって、疑問として浮かび上がる、アメリカの投下目的を考える。 	
107	(15) 本土決戦か、降伏か pp.252-253	<ul style="list-style-type: none"> ・筋道としては、本土決戦体制から、ポツダム宣言受諾―降伏に至る経過を追うことになる。しかし、その経過のなかで、人びとはどのような状況に置かれたのかを追わせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本土決戦体制から、どのようにしてポツダム宣言受諾―無条件降伏に至ったのか、その経過を追いながら、そのなかで人びとはどのような事態に直面したか、その実態を知る。 	
	8・9章のまとめ pp.254-255			第8・9章での学習をふり返る。特に、印象に残ったことを4コマ漫画で表現する。(1時間)
第6部 現代				
第10章 現代の日本と世界				
	10章の導入 pp.256-257		歴史が現在とつながる時代を学習する。さまざまな社会の課題について、歴史をふり返りながら考える。	章扉(pp.256~257)の写真や地図、語句を通して「今の世界の子どもたち」について考えてみる。(1時間)
108	(1) 焼け跡からの出発 pp.258-259	<ul style="list-style-type: none"> ・敗戦後の焼け跡のなかで、衆議院議員選挙に立候補した女性たちや食糧メーデーで発言した子どもの姿などを通して人びとの願いと行動を知り、社会の変化を具体的にとらえさせる。 ・占領下の大きな変革を理解するとともに、敵国であったアメリカの占領政策を、多くの国民がなぜ歓迎したのか考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・敗戦後、人びとは何を願いどのような行動を起こしたか、GHQの占領政策を人びとはどう受け止めたか考える。 	
109	(2) もう戦争はしない pp.260-261	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次世界大戦の学習を踏まえ、人びとが憲法をどのような思いで迎え、憲法制定過程でどのような願いを込めたのか考えさせる。 ・憲法制定過程を知るとともに、憲法の外におかれた沖縄や、新憲法のもとで逆に権利を奪われた旧植民地出身の人びとの思いに目をむけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法はどのようにして生まれ、人びとはどのような気持ちで新しい憲法を迎えたかを考える。 	
110	(3) 走れ、ぞう列車 pp.262-263	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア太平洋戦争下、全国に広がった「猛獣処分」によって、象やトラ、ライオンなどが次々と殺されていった。一方で、名古屋の東山動物園では、園長と職員が「処分」の命令に反し、象を守りぬき、2頭が生き残った事実を説明する。 ・その事実を知った東京・台東区の子どもたちが、1949年「子供議会」という自治組織での議論と決議を経て、象の借り入れに奔走し、その熱意が大人たちを動かし、東京の子どもたちが列車に乗って名古屋に象を観に行くことが可能となった事実を解説する。 ・こういう主張や表現が可能となった背景の一つに、教育の民主化がある。いわゆる、日本国憲法・教育基本法体制である。図版などから、戦後新教育の出発時の困難と希望を学ばせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦中、動物園を舞台に「猛獣処分」という命令に対して、その命令を遵守した人、それに抗った人、さまざまな生き方と選択肢があったことを学ぶ。また、その抵抗により、生き残った象は、子どもたちに夢と希望を与えた。今では、容易に想像ができない、子どもたちの社会への働きかけ、能動的な行動を知る。同時に、そのことを可能にした背景の一つとして、戦後の新教育―日本国憲法・教育基本法体制―がある。子どもたちの意思と活動を通じて、その背景にある、社会的価値の転換と、その大切さを考える。 	

111	(4) 南北に引き裂かれる pp.264-265	<ul style="list-style-type: none"> ・1945年8月に解放を迎えた朝鮮では新国家建設へ向けて動き出したが、米ソ両国は朝鮮半島を分断しつつ軍政を敷き、その動きを抑えた。 ・米ソは世界各地で厳しく対立していたが、特に東アジアでは中華人民共和国が成立するなど急激な変化が起きた。 ・朝鮮の武力統一を掲げた北朝鮮が韓国に侵攻すると、その戦争が各国を巻き込んだ国際戦に発展した。 ・戦争のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させることで、戦争の本質に迫らせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争の中で当時の人びとがどうしていることを考えていたか想像する。 	
112	(5) インドも中国も来なかった pp.266-267	<ul style="list-style-type: none"> ・長い戦争から脱して、戦後の人々は、1946年の赤ちゃんの名前(男)を見ると、1位が「稔」で、2位が「和夫」だったことに表れているように、「食料」「平和」を求めて、あゆみ始めた。人々は、平和を日本国憲法や民主化で実感し、維持しようとした。それでは、戦後の日本は、戦争を繰り返さないために、人権・民主主義・国際理解を広げてきたのだろうか。いわばその日本国憲法体制と、ここで、冷戦下の日本が、米国と軍事同盟を結ぶ道を選んだことを学習するが、この日米安保体制と、二つの対立として現代史を学習し、意見を言う授業をつくりたい。 ・「日本の進む道について、君は、次の二つの道のどちらを支持しますか」と問いかけ、授業の学びを通して、それを追求していく。二つの道とは、サンフランシスコで、平和条約と日米安全保障条約を結んで、日米安保体制の道を選択する、これが一つの道である。もう一つの道は、「平和問題談話会の講和問題についての声明」(『世界』1950年3月号)に代表される、非同盟・中立の主張である。 ・冷戦の激化(とりわけ朝鮮戦争で日本全土が重要な役割を果たすようになったこと)により、アメリカが日本との講和を急いだため、二つに分かれていた中国や朝鮮、東側陣営の国々は講和会議に不参加だった。そして、インドも会議に参加しなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上野動物園に象がやってきたことから授業は始まる。日本に送られた象に添えてあったインドのネルー首相の手紙を通して、非同盟・中立という、戦後次々と独立したアジアの国々の主張を学び、また、既習の冷戦下東アジアの状況をふまえ、今後日本は、どちらの道を進むべきか、意見を述べ合う。現実には、その後日本は、日米安保体制のもとで歩むことになるが、当時、日本国民の多くが「中立国への道」を望んでいた(1949年8月、『読売新聞』世論調査によれば、「永世中立を望む」が72.4%)。また、いかなる国に対しても軍事基地を与えることに反対する運動が起こっていたことなど、「もう一つの道」は非現実的ではなく、国民の中に真剣に模索されていたことに注目する。 	
113	(6) ゴジラの怒り、サダコの願い pp.268-269	<ul style="list-style-type: none"> ・第五福竜丸事件は、「原爆を許すまじ」との思いを呼び起こし、原水爆禁止運動が広がる。運動に関わった人びとやサダコの思いに迫りたい。 ・3・11後の私たちは、「被爆国がなぜ原発大国になったのか? ヒロシマはなぜフクシマを止められなかったのか?」(加納実紀代『ヒロシマとフクシマのあいだ』インパクト出版、2012年)という問いかけを受け止めたい。アメリカ発で「原子力の平和利用」キャンペーンが行なわれ、原爆=悪、原発=善として切り離し、使い分ける論理が国民の意識に浸透していく。「ヒロシマとフクシマのあいだ」をつなぐ論理を考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第五福竜丸の被災をきっかけに原水爆禁止運動が高まり、被爆者への支援も始まる。原水爆の恐ろしさを、怪獣「ゴジラ」が象徴的に表す。一方、アメリカから「原子力を平和に」というキャンペーンが行なわれ、原発が導入されていく。原発を受け入れる世論が形成されていく理由を「鉄腕アトム」を例に考える。 	
114	(7) 国会を包囲する人波 pp.270-271	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法体制と日米安保体制の対立として、現代史の流れをとらえたとき、国民の日本国憲法を守り、実現していくとする行動がしだいに国民生活の場面でも見られるようになったことを、安保闘争の学習を通して気づかせる。 ・安保闘争では、国民が日本の進む道を真剣に考え、政治に普通に関心を持っていたことに気づかせる。 ・2015年夏、安保法制をめぐる、連日人びとが国会へ押し寄せた。ふだん政治に無関心と言われていた若者や子育て中のママ、仕事帰りの市民らが、集団的自衛権は憲法違反であることや、政府の強行に反対する行動に出た。マイクを握った坂本龍一は、国会前の12万人の行動について「憲法を自分たちの血肉化すること」と語った。主権者としてふるまうとはどういうことかにもスポットを当てて、授業をつくっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安保闘争に加わった人びとの思いを予想する。また、冷戦という世界の状況の中で、沖縄もふくめた日本の進路をどうするか考えた人びとがいたことをどう思うか発表する。 	
115	(8) 豊かさとその代償 pp.272-273	<ul style="list-style-type: none"> ・「1961年、天野正子は、大学を卒業して教師になった。1万8000円の初任給で、まず初夏のスーツと靴を買った。服装が整うと、つぎに彼女は、サンヨーの電気洗濯機を月賦で買うことにした。疲れて帰ってからの、洗濯板と格闘する『洗多苦』は辛かったし、水仕事で手の荒れることも怖かったからである」(鹿野政直『日本の現代』岩波ジュニア新書、p.22)。高度経済成長は、人びとの実感から見れば、人びとがモノとカネの不足という意味での「貧しさ」から脱却して、このような、家電製品の普及、マイホーム、マイカーなど、大量消費、中流意識の広がりへと、急激な転換が行われた時期であったことを、さまざまな例から知る。 ・社会の構造的な変化にも目を向ける。都市化が急速に進展し、地方は工業化の集中した太平洋ベルト地帯を人的・物的に支える地域になり、過疎化が進んだ。エネルギー源が石炭から石油へ転換し、石炭産業が衰退、安価な石油を輸入し製品を輸出する加工型貿易へ。 ・豊かさの獲得と環境の汚染。水俣病などの公害病や、環境汚染が全国に広がる状況の中で、物質文明の進歩・発展を問い直すともいうべき市民運動・住民運動が広がり、反公害闘争が高まっていったことを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農村に地殻変動が起きていた。1950年代半ば以降新規の農業就業人口が急速に減り、後継ぎの長男がぞくぞく村を離れていった。大人たちも、農閑期、さらには通年都会へ出稼ぎに出て行った。それらによる農村や家族の崩壊を学び知る。高度経済成長によって、日本社会の生活水準が、以前とは断絶した豊かな社会を実感するほど上昇したのだが、そのことについて学ぶとともに、社会の構造的変化にも目を向ける。高度成長政策を推進する政府に対して、公害や環境問題の多発をきっかけにして、人びとが文明のあり方を問い、住民運動や反公害闘争を進めたことについて考える。 	

116	(9) 第三世界と東西陣営 pp.274-275	<ul style="list-style-type: none"> ・1960年代、東西の対立が続く中、アフリカ諸国の独立が続き、解放と平和を求める第三世界の運動が高まった。世界政治の動向の中心はベトナム戦争だった。それぞれの国家、個人がどうかかわったのか考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京オリンピックを切り口に、東西対立、アフリカの独立、「ブラハの春」を学ぶ。ベトナム戦争の経過を知り、若者が歌や行動で何を訴えようとしたのか考える。 	
117	(10) 基地の中の沖縄 pp.276-277	<ul style="list-style-type: none"> ・「基地の中に沖縄がある」といわれる実態を学習する。祖国復帰運動が高まり、1972年復帰が実現する。日米両政府が発表した「核抜き本土なみ」は守られたのか。アメリカの戦略との関わりで沖縄返還が行われたことを理解させたい。 ・日本への復帰後も、米軍基地は残り、むしろ集中度は増した。1995年の少女暴行事件、2004年の米軍ヘリ墜落事故、2014年からの辺野古新基地建設など問題は深刻さを増している。沖縄の声を伝え、どうしたら解決できるか考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・嘉手納付近の2枚の地図を読みとる。村の住民の土地がとりあげられて基地がつけられた経緯と軍事施設、米兵の生活の現状をつかむ。B52墜落事故、復帰運動、日本への復帰の経過をたどり、「核抜き本土なみ」の約束は守られたのかを問う。むしろ沖縄への基地集積が進められ、深刻化する基地問題の現状を考える。 	
118	(11) パレスチナの平和 pp.278-279	<ul style="list-style-type: none"> ・1948年、パレスチナの地にイスラエルという国家がつけられた。その結果、480万人もの人びとが故郷を追われ、難民となった。 ・その後、パレスチナ人は独自の国家をつくらうとするが、イスラエルは武力で抑えてきた。それでも、イスラエルの侵攻に反対するイスラエル人を生み出している。 ・パレスチナとイスラエルの人びとが、対立しながらもどのようなことを考えているか想像させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナとイスラエルの人びとが、対立しながらもどのようなことを考えているか想像する。 	
119	(12) 問い直される戦後 pp.280-281	<ul style="list-style-type: none"> ・中国残留日本人孤児の問題を導入として、戦後政策の中で「国家間で解決済み」であるとして、ないがしろにされてきた個人への補償はどうあるべきかを考えさせる。 ・人権を求める世界の流れを、現在の問題につなげて理解させさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国残留日本人孤児が、中国でも帰国後も苦しい生活を送ってきたことを知る。戦後政治の中で「国家間で解決済み」とされてきたことに対して「個人への補償」を求め、人権侵害の問い直しに取り組む現在の世界の動きを考える。 	
120	(13) 絶えない戦火 pp.282-283	<ul style="list-style-type: none"> ・現在でも、人が武器を取って争い合う紛争が、世界各地で起きている。人は、戦争のない世界を望みながらも、戦争をくりかえす。戦争はなぜ起こるのかを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・くりかえされる紛争・戦争はなぜ起こるのかを考える。 	
121	(14) 持続可能な未来を pp.284-285	<ul style="list-style-type: none"> ・開発された日本も含め先進国は、持続不可能であり、人びとの幸福度は低下してきている。未来に向けて、これからどのような社会をつくらなければよいか、考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人としての豊かさや幸せ、今の社会のあり方に関する問題意識を深め、未来は選択できるということを理解する。 	
123	(15) 3月11日午後2時46分 pp.286-287	<ul style="list-style-type: none"> ・本時は、3分野を連動させて、多面的に学ぶことができるテーマである。歴史では、自然災害の中でも、古代からくり返されてきた震災が、人びともたらした教訓や変革を学ばせ、記憶が風化する中で、歴史的事象をどのように語り継いでいくかを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・経験や体験のある者、ない者が、歴史的事象をどのように語り継いでいくかを考える。 	
124	(16) 平和という言葉 pp.288-289	<ul style="list-style-type: none"> ・平和な世界とは、どのような状態なのか、考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平和とは何か。平和という言葉の意味を考える。 	
	10章のまとめ・歴史を体験する pp.290-291		<ul style="list-style-type: none"> 「わが家の20世紀年表」をつくり、教科書を通して学んだ歴史を自分の家族の人生とどのような関係にあったか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 家族の歴史と世の中のできごとと対比することを通して自分が歴史につながる存在であることを実感し、歴史学習のまとめとする。(1時間)